

Takamine Guitars

Acoustic
Guitar Book
Presents



THINK ACOUSTIC
LIVE ELECTRIC
PLAY TAKAMINE





Guitar Factory Inquiry 日本が誇る老舗ブランドが実践する物作りの哲学

Takamine Factory Report

創立60年の節目を迎えた 老舗ギター・ブランドの工場！



1970年代末に完成させたエレクトリック・アコースティック・ギターを武器に世界の音楽マーケットを席巻してきたタカミネ。ギター作りに邁進して今年、60周年を迎えたメイド・イン・ジャパンの老舗はどんな考え方の下、ギターを製造してきたのだろうか？岐阜県中津川市に居を構える同社の工場におじゃまして、長きにわたり培ってきたギター作りの精神を取材させてもらった。

取材・文・撮影／アコースティック・ギター・ブック編集部 Acoustic Guitar Book





Featuring
 Interviews With Executives,
 Limited Models 1987-2022, etc.

タ カミネは、1959年に岐阜県坂下町（現中津川市坂下）でアコースティック楽器の工房として創業。ギター専門の色を強め1962年に高峰楽器に改組、1970年代半ばに自社ブランド“Takamine”を立ち上げる。転機となったのはその直後だ。ライブ規模の拡大に伴い、大音量下でのアコースティック・ギターのサウンドが求められる中、独自のバラスティック・ピックアップを開発し、電気的に増幅するエレアコを1978年に発売。当初からイーグルス、ブルース・スプリングスティーンなど多くのミュージシャンが使用したこと、同社初のエレアコは世界中で高く評価され、市場を牽引するブランドとして認知されている。今年、60周年を迎えた同社に赴き、製造現場の実態に触れた。

——60周年おめでとうございます。この節目に関して、まず思うことは何でしょうか？

橋 勇己（代表取締役）「大過なく60周年を迎られたという素直な喜びですね。世界中の誰もが予想だにしなかったコロナ禍により、人々が直接ふれあうコミュニケーションを寸断され、楽器店でギターを手にすることはおろか、仲間と弾き語る機会さえ失った中、世界中のタカミネ・ファンの方々に支えられて迎えた60周年ですので、みなさんへの感謝が第一です」

——社屋と工場を拝見させていただき、比較的新しい建物だと感じました。こちらはいつから稼働しているのでしょうか？

橋「今の社屋は2005年に建てたものです。創業はJR坂下駅から歩いて5分くらいの場所にある同じ町の別のところでしたが、ギターを生産する上で手狭になり、老朽化も進んでいましたので。現在の工場は環境も申し分なく、移転先に選んだのは正解でした。この地で創業60周年を迎えて本当に良かったと思います」

——ちなみに、橋社長はいつからタカミネに在籍されているのですか？

橋「1982年、ちょうどタカミネが20周年にあたる年でした。当時の経理部長で後に社長を務めた杉村（博司）に声をかけてもらい、入社後は基本的に、経理や人事、生産管理を担当しました。ちょうどオフィス・コンピュータを導入し始めるタイミングでした」

——タカミネは新しい機械や技術を導入することに長けているブランドだと考えます。そういう部分で、橋社長が果たした役割も大きかったのではないか？

橋「そうですね。工作機械は高価な物ばかりなので資金繰りは重要ですが、導入には常に積極的であるべきだと思います。私は当時の経営者たちをそばで見ていましたが、彼らは生み出した利益を素材や新しい設備に常に積極的に投資していました。こうした物作りに向かう姿勢を見てきたことが、私の考え方のベースにもなっていると思います」

——物作りの面でタカミネにとって最も重要な

な哲学とは何でしょうか？

橋「『綺麗な物作り』というのでしょうか。私が入社した頃は、詳細な仕様書がなくとも最良のスペックを導き出したり、治工具がなければ自分たちで考案したりと、ヴァイタリティを持ち創意工夫してギターを作り上げる姿を目にしました。やはり物作りは人間力、作り手の意志や技術とそれだけで培われた感性が重要だと思います。タカミネは1人で1本のギターを作るのではなく分業制なので、各パートを担う作り手それぞれの責任感、ひいては人間力をどう上げていくかが大切ですね」

——60周年モデルを始め近年のLTDモデルからは、日本人の矜持みたいなものを強く感じます。そうした部分にも繋がっていそうなお話ですね。

橋「LTDモデルの歴史を振り返ると、当初は

Interviews with executives

「物作りは人間力、つまり作り手の感性や技術が重要だと思います」

常に新しいことにチャレンジしてきた歴代社長たちからのバトンを受け継ぎ、現在、タカミネの舵取りを任されている社長の橋氏が掲げるのは“人間力”。機械化が進む中でも職人の気概や矜持こそが良いギター作りに繋がると語る。そして、そんな社長と二人三脚で会社を運営する取締役の寺崎氏、タカミネの両輪とも言える2人に同社60年の歩みを語ってもらった。



最大のギター市場であるアメリカの代理店主導の流れで先方のデザイナーの案を受け、日本の我々側で技術的な検討を経て製品化されるというものでした。しかしその後、レーザーやCNCをギター作りに活かす技術を確立した頃から、これらの能力を最大限に発揮するため、タカミネのブランドを展開している我々自身が主体性を持ってデザインから製品化まで全てを担うようになりました。そんな現在のタカミネの集大成と言えるモデルが、60周年モデル“THE60TH”と“LTD2022”的2本だと自負しています」

寺崎 誠(取締役)「普段は営業企画主体で開発を進めるのですが、“THE60TH”と“LTD2022”は、例外的に橋と私のツーマン・プロダクトの取り組みから始まりました。私はタカミネ・エレアコの黎明期の後に入社しており、パラスティックPUも橋が入社する以前に開発されています。我々ではない先輩たちが作った心臓部“パラスティックPU”こそが、現在エレアコのスタンダードと評価していただき、世界中でお求めいただいている

いるタカミネ・ブランドの原点なんですね。60年を遡る中で大きな転機となったエレアコ黎明期のタカミネはどうだったんだろう?という話を橋と交わしていくうちに、2人の中で自然とコンセプトが固まりました」
—60周年モデルでは、黎明期に名を馳せたプリアンプの復刻もポイントですよね。
橋「実は、ブラウン・プリアンプ(1970年代末当時のFET型プリアンプ)の復刻を望む声はアメリカの代理店から度々いたいでいました。しかし18V駆動の“CT4-DX”、シンプルな操作性の“CT-4BII”など、現代の市場を見据えて設計したプリアンプが既にある中で、当時のプリアンプをそのままリメイクするには至りませんでした。今回、エレアコの原点に立ち返るコンセプトの中で、初めて当時のプリアンプを現代版にリメイクする開発に向き合いました。この2本は当時のタカミネ・ギターを作り上げたスタッフへのリスクペクトを背景としたモデルです。ドレッドノートが全盛の1970年代にガット・ギターのボディ・シェイプを選び、当時ほとんど使わ

れていなかったハワイアン・コア材の採用などに、先人たちの独創性と強い意志を感じたことでした」

—先ほど寺崎さんが「パラスティックPUありき」とおっしゃっていましたが、それはどういう意味なんでしょうか?

寺崎「私は長い間、タカミネで様々な製品の開発に関わっていますが、パラスティックPU本体の構造は、ノイズ遮蔽性を高めたくらいで根本的には変わっていません。この部分は最初のエレアコが出た時点での意味で完成していたと言えます。だからタカミネにおいて全てはパラスティックPUありきなんです」

—つまり、それこそがタカミネ製エレアコのDNAになっている、と。

寺崎「言葉では表しづらいのですが、私の中には技術やコンセプトの違いを持つ各世代のプリアンプに共通して“このテイストがなければ”というタカミネの音というのがあります。以前、吉田次郎さんに“レスポールのフロントPUやテレキャスターのリアPUみたいに、タカミネのエレアコ・サウンドは弾いた瞬間に、これだ!とわかるカルチャーがあるよね”と言っていただいたことがあります。PAスピーカーから聞こえるエレアコのサウンドは、単に部屋で聞かれるギターの生音が拡大・再生されれば良い、というものではないことを、イーグルスを始めバンドの中での

Limited Models 1987-2022

革新的なデザインと仕様が施された イヤー・モデルの系譜を紐解く

通常ラインとは異なる材やスペックが積極的に採用された年度限定モデル。
1987年から続くシリーズの中からタカミネらしさを纏った個性的なモデルたちを紹介しよう。



**LTD 1987
“25th Anniversary”**

▲イヤー・モデルの発端は、ジャクソン・ブラウンから寄せられた「白いドレッドノートが欲しい」という要望。そのオーダーに応えて作ったギターを1年間だけ量産、それが翌年から正式にスタートする年度限定モデルというアイデアへ発展した。



**LTD 1988
“Archtop”**

▲イヤー・モデルの初年度に当たる個体。アーチトップ形状に削られたトップはフレーム・メイプルで、サイド&バックもメイプルが採用された。今やタカミネ製エレアコの大基本と言えるユニット型プリアンプが開発されたのも、この年だった。



**LTD 1993
“Santa Fe ESF-93”**

▲タカミネの名を世界に広めたエポックメイキングなモデルの1つ。前年に完成した同社オリジナルのNEXシェイプ・ボディをベースに、トルコ石を大胆に使った緻密なインレイで装飾。その美しいデザインは世界中のギター関係者の度肝を抜いた。



**LTD 1994
“Santa Fe PSF-94”**

▲前年の大成功を受けて再び製造されたサンタフェの2代目。ここでもレーザー・カット・マシンが大活躍。量産モデルとは思えないほど緻密なインレイ・ワークを実現する礎となつた。トップにはシダー、サイド&バックにはコアが採用されている。



**LTD 1995
“Santa Fe Sunrise”**

▲3代目サンタフェ。ボディ形状は伝統的なニューヨーカー・スタイルだが、トップにシダー、サイド&バックにオvangンコールを採用した仕様が斬新。デザインは前身モデルを踏襲したインディアン柄で、「陽が昇る様子」がテーマだった。



Interviews With Executives,
 Limited Models 1987-2022, etc.

Featuring

アコースティック・ギターの在り方に触れ続けてきた我々は、血としてそれを知っている、ということでしょうか？
 —エレアコという楽器の開発を牽引してきた存在だけに、タカミネの歴史はエレアコの歴史に重なるとも言えそうですね。

寺崎「今回、発売初期の古いカタログなどを顧みる中で、当時の彼らが直面していた大きな壁を思い出しました。生ギターが神格化されていて、エンドpin・ジャックの穴を拡張することすら忌避されていた時代に、ボディの肩に穴を空けてプリアンプを付けたギター

を作ろうとしたわけですから。エレアコ全盛の今と違って、当時の人たちは大きな逆風の中で開発に勤しんでいたと思います。それを私たちなりに想像して、丁寧に掏い上げてみよう」と話しました」

樋「タカミネの中で現場から今に至るキャリアをお互いに継けてきた私と寺崎だからこそ、そういう話になったんですね。結果的に60周年の節目に自社の歩みとエレアコの原点を再認識できる製品になったと思います」

—では、この先タカミネをどう成長させたいか、お考えをお聞かせください。

樋「アイデアは色々あります。世界レベルのアーティストのステージでのエレアコ・サウンドを常に実感して追究しているのが寺崎ですが、その姿を追いかける後進のスタッフも育ってきています。最前線のサウンドを吸収しながら育ち続けるタカミネ・エレアコのDNAが引き継がれ、積み重なっていくですから、きっとどの時代でも支持していただけるエレアコ・メーカーであり続けると、私は信じています」

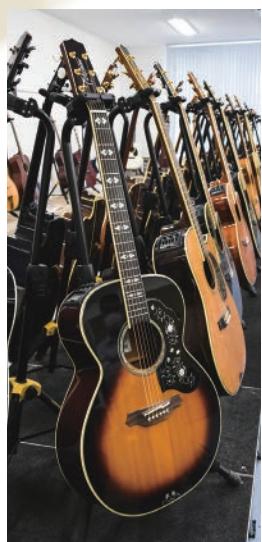
Palathetic Pickup

▼1970年代末のカタログ。タカミネ独自のピックアップ・システム、パラスティックPU・システムが図解されている。ボディにコンタクト・マイクを貼って無理矢理エレアコ化していた時代にあって、このシステムの登場は画期的であった。ここで採用されていたのが「ブラウン・プリアンプ」と通称されるFET型のプリアンプだ。



THE60TH

►写真で橋社長が手にするのが60周年を記念して60本だけ製造された“THE60TH”。原点回帰をテーマに、同社のエレアコ元年である1978年当時に作られていた“PT05E”へのオマージュとも言えるボディ・シェイプを備える。FET素子を心臓部に持つ「ブラウン・プリアンプ」が復刻されていることもポイントだ。



LTD 2009
 "Shell"



LTD 2010
 "Miyabi"



50th Anniversary
 DMP50TH



LTD 2012
 "Michi"



LTD 2019
 "Moon"

▲2009年モデルは、ブルース・スプリングスティーンからのオーダーがアイデアの源となった。デザインのモチーフは、ブルースが所有する1950～1960年代に作られたホーナー製ギター。歴代モデル中、最もクラシカルな意匠を携える。

▲「雅」をテーマに掲げ、和風のデザインが施された1本。ヘッドやピックガードをはじめとする各部に入れられた意匠は、本物の着物があしらわれている。布をアクリル板で挟み込み、それを成形するという手の込んだ手法が採用された。

▲2012年にタカミネの50周年を記念して作られたモデル。イヤー・モデルではなく、数量限定で生産された。50周年モデルとしては、金箔をアクリルで挟みインレイした世界50本限定モデルが先行販売され、こちらは2ndエディションに当たる。

▲2012年のイヤー・モデル。写真のドレッドノート型とは別に、同じ意匠を纏った小型ボディのクラシック・ギターも製造された。つまり、この年は50周年モデル、イヤー・モデルを合わせて4本の限定モデルが発売されたことにになる。

▲人類初の月面着陸から50年の節目であることがデザインのモチーフ。タカミネならではのシンライン・ボディ（薄胴）を備えたエレアコ・シリーズをベースに、豪華なインレイを施して仕上げてある。カラーは黒ではなく、ミッドナイト・グレー。

Factory of Takamine

世界で愛されるタカミネ製アコースティック・ギター、 その工場で見つけた物作りへの真摯な姿勢

エレアコの大定番として世界中のギタリストが親しんでいるメイド・イン・ジャパンのギター、それはギター作りの伝統をしっかりと継承しつつも、常に革新の気概に満ちた熱気溢れるファクトリーで製造されていた。



Factory

►岐阜県中津川市にあるタカミネの本社工場。ブランド名の元にもなった高峰山を見上げる位置にある。2005年に新設された。



Wood Materials

▲木材保管庫には希少な材も多数保管されている。写真は最高峰のサイド&バック材として知られるハカランド(ブラジリアン・ローズウッド)。



Joining

►接着材は目的により選ばれており、ボディ・トップ／バックのセンター・ジョイントの工程には伝統的なニカワが採用されている。



Wood Materials

▲ある程度まで加工したマテリアルを保管しておく倉庫。温度と湿度が一定の状態に管理されている。強制乾燥後、加工された木材は形状変化を避けるため、ある程度の期間で含水率を戻してから製造に着手する。



Glue

▲接着に使うニカワを溶かすための機器。ニカワは温度が下がるとすぐに硬化してしまうため、センサーにより一定の温度が保たれている。



Craftsman of Takamine #01

強い好奇心を多方面に向ける“創意工夫”的クラフトマン

「1990年に入社し、生産部の木工部門を経て、現在はハンドメイド・セクション“クラフト・ショップ”に所属しています。僕は東京の出身で、ちょうどローリング・ストーンズが来日した20歳の年に音楽雑誌を買い漁っていたら募集広告の掲載を見つけて…、インテリア・デザインの学生だったのですが、ちょうど就職活動のタイミングで、これは!と思ったんです。洋楽が好きで、海外アーティストを見ていてアコースティック・ギターといったらタカミネだろうと。量産工程ではバインディングを巻く作業に長く携わっていました。細かい作業なんですが、持ち前の手先の器用さが活きたかなと思います。業務でギターの製作パートを担当するだけでなく、自分1人でギターを作り製造過程を一通り学びました。ギター以外にも手仕事には広く興味があり、車やバイクをいじったり、パンを焼いたり、2×4の家も自分で建てたんですね(笑)。家を建てたなんというと驚かれますねが、ギターの方が細かくて緻密な部分が多く、それぞれ難しくて面白いですね。多方面に興味を持って実際に手掛けることで色々な知識を蓄えてきたことは、ギター作りでも新しい治具をひらめいたり、結構役に立っている気がします。現在は“THE60TH”的なスペシャルなモデルの製作を始め、リペアや新製品の開発にも関わらせてもらっています。“THE60TH”は、胴のコア材を曲げるのにホント苦労しました。機械プレスだけでの曲げを試みたところ、虎杢部分で簡単に割れてしまうため、先にベンディング・アイロンで手曲げしてから機械で仕上げる、という工程を用いて実現しました。ハードルを乗り越えることで、もっと良いギターを作れるようになれると思うので、このような経験は大変というよりも面白いですね」



Bracing Works



Interviews With Executives,
 Limited Models 1987-2022, etc.

Craftsman of Takamine #02

緻密なインレイ・ワークを根気よく進める若き職人



中村誠路

「入社して4年目になります。もともとはギターを弾いているだけだったのですが、作る方にも興味が湧いてきて就職しました。いまでも暇さえあれば家でギターを弾いています。現在は主にバインディングやインレイなど、装飾関係の工程に携わっています。前工程で胴エッジの溝切り加工が施されたボディに、私が一番外側のバインディングと内側のパーフリングを1人でインレイする形です。60周年モデルのパーフリングは、ブラック／アイボリー／ブラック／アヴァロン、ブラック／アイボリー／ブラックの7層の構成となっており、内側から順番に接着します。この作業精度は装飾の出来栄えに影響するので、慎重さが要求されます。特に飾り同士が角をなす部分は、“トメ作業”といって、アヴァロンをきっちり45度でカットしてピッタリ90度になるように削り合わせ、継ぎ目に黒いラインが出ないように仕上げる難易度の高い作業なんです。ノミの刃の内側を鏡のように使って、そこに映った飾りから実際につながった後の仕上がりを目算してカットする角度をコントロールします。見せ場ともいえる、このトメ作業は“THE60TH”では14箇所もあるので、全部を終わらせるまで6時間ぐらいかかります。飾りを入れた後、

外周のバインディングを接着する作業までを含めると、トータルで8時間ぐらいでしょうか。手間のかかる難しい作業で、私も最初は倍ぐらいの時間がかかっていました。難易度の高い作業も、常にノミをしっかり研ぎ、よく切れる状態を常に保つという基本的なことを守り、回数を重ねることで今の作業時間にたどり着いていますが、まだまだですね」

Inlay Works



Bracing Works

▲接着剤が乾くまでトップ板に力木を押さえつける工程。バキューム・プレス機を使い、上からラバーを被せて密閉、中の空気を抜くことでしっかりと圧着させる。



Top Bracing

▲トップにプレイスがしっかりと接着された状態。ギター・サウンドの根幹に関わる部分であるため、非常に丁寧な作業が心がけられていた。



Inspection Process

▲はみ出した接着剤を除去する工程。見えない部分ではあるものの、こうした処理を施すことが完成したギターのクオリティを高めるのは間違いない。



Neck Joint

▲ネック・ジョイントはトラスロッドを挟み込むような形で根本に2本の補強材を組み込む方式を採用。ネックの元起きを防ぐための処置だ。



Painting Process

▲塗装の工程。下塗り(生地着色、樹脂止め)、中塗り(肉乗せ)、上塗り(仕上げ吹き)の順番で進められ、その間に何度も研磨が施される。

「最初、私はパート従業員として携わり、その後、正社員として採用されて15年になります。パート時代は別の作業に就いていたんですが、社員になってからは主にヘッドやボディのインレイ作業を担当しています。いま手掛けている記念モデル“THE60TH”的ヘッド・インレイは、外周のバインディングまで入れると全部で8レイヤーあって、それぞれを角でつなげるトメ作業も3カ所あり、ノミを使った慎重な作業が求められます。緻密な作業ではあるのですが、特にコツがあるというわけではなく、ひたすら綺麗な仕上がりを意識して作業を進めています。アイボリーのラインにブラックがはみ出していたり、各ラインがしつかり揃っていないと美しくないので、そういう部分に気を遣っています。あと、仕上がりの質感を高めるために、配置するアヴァロン・ピースの柄も1枚1枚選んでいるんです。貝の柄もいろいろあって、1色に近い見た目のものがあれば、すごくキラキラしたものもあるので、それを選びながら作業していくって、最終的に全体として綺麗な見た目になるようバランスよく配置するようにしています。60周年の特別な意味を持つ“THE60TH”は、特に慎重にアヴァロン・ピースを選びながら作業を進めているので、トータル3時間ぐらいかかりますが、作業を終えて仕上がりを見ると、その甲斐があったなと嬉しく思います」



Inlay Works



Avalone Shell

Craftsman of Takamine #03

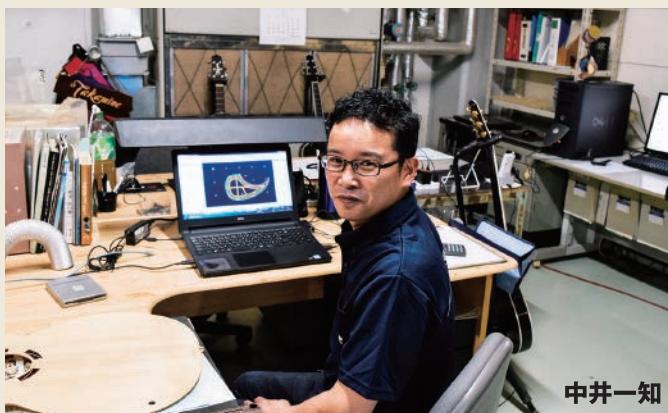
女性ならではの繊細な美意識でギターを美しく彩る

松井良美



Craftsman of Takamine #04

製造をエンジニアリングで支える縁の下の力持ち



中井一知



「入社して今年でちょうど20年になります。前職で工作機械を作っているメーカーに勤めており、たまたま縁があつて入社しました。実は入社前に見学に来たことがあるのですが、自身は工作機械しか作つていなかつたこともあり、その機械で作ったギターの仕上がりに感動したんです。それで、自分でもぜひこの仕事に携わりたいと考えました。入社後は前職の経験を生かして図面を引いたり、生産効率を高めるための治具を開発するなどの業務に就いています。実際にギターを作る作業に携わっているわけではなく、生産推進化の係長という立場で、現場を地味にサポートしています(笑)。こういう作業が必要だったら、こういいう治具がいるとか、機械にこういいうプログラムを組む必要がある、という部分ですね。ギターを製造するだけではなくて、それを作るための治具まで自作できるのは、弊社の大きな強みだと考えています。立派な工作機械があっても、それを司っているのは人ですから」



Blueprint



Laser Machine

▲精密な作業で威力を發揮してくれるレーザー・カット・マシン。量産であつても緻密なインレイが施せるのはこの機械の恩恵も大きい。

Industrial Robot

▲予め施したプログラムに沿って複雑な作業を全自动でこなす工业用ロボット。従業員のいない深夜に稼働させておくことも可能で、効率化に貢献している。



Specialized Machine

▲こちらも自社開発の機器。センサーでボディとネックの各所を計測して指板を削り、歪みのない真っ直ぐなネックを実現。



Specialized Machine

▲ナットの溝切りを行なう自社開発の工作機器。個体差なく、全てのギターのナット溝を正確な間隔と深さで切ることができる。



Specialized Machine

▲ダブルティル・ジョイントのネック・ボケットを削る機械。ネック側も同じ機械で削る。こうした精密かつ正確な加工が必要な箇所は、機械が最も得意とするところだ。

Craftsman of Takamine #05

工作機器での高精度加工と、手工技術の維持・向上の堅持を両立するリーダーたち

「我々がレーザー加工機とCNCルーターを導入したのは1993年のこと、アコースティック・ギターの製造では世界に先駆けた取り組みでした。私(寺崎)は、海外の著名ギター・メーカーや中国、インドネシアのOEM工場に出向いてその進化に触れて来ていますが、今日ではこれらの工作機器の導入はごく普通のことです。中国のトップ・クラスの工場では、最新のCNCルーターがネック・ジョイントの加工やラインニング・カットの組み込み溝の加工などに精度を発揮しています。とはいえ、工作機器の精度と加工内容は日進月歩であるものの、最新機器を配した工場で作るギターが必ずしも世界最高品質であるとは限りません。どんな工作機器も使いこなすのは人だからです。CNCではルーター刃の軌跡データを作る際に木目の抵抗への考慮などが必要ですし、加工する木部を固定する治具の考案など、従事者の経験とノウハウが結果を引き出します。また、手作業が製品品質を決定する部分もまだまだ多く、木部や塗装の研磨、フレットなど細部の仕上げ、総合判断が必要な弦高セッティングなどの重要さは変わりません。

タカミネでは最新工作機器の検証と導入に積極的である反面、各作業分野での経験値を持ち製造工程を指揮する4名の課長の元、手工技術の維持・向上に努めています。木工部門担当の青山達也、山本大介、塗装から研磨工程を管理する平井宏征、塗装後の研磨、最終セッティングまでを担当する森 崇の4名に加え、QC(品質コントロール)担当として、塗装後のバフ仕上げのポイントで自身も長い作業経験を持つ松井俊昭、タカミネの心臓部であるエレアコの機能を含め最終セッティングと品質を見極める中原智志の2名が、製品の品質堅持に努めています。

新規商品の企画、開発を担う私、総務で作業者の保全と生産管理を手掛ける玉谷、そして

タカミネ・ブランドの総指揮を執る代表の橋と、各担当者が日常的に直接連絡を取り合うホットラインを持ち、ストレートかつシンプルな指示・伝達の元、ギター製造に従事する1人ひとりの判断や能力の向上を図り、人間力を高めるギター・メーカーを目指して稼働しています



(右から) 寺崎 誠、森 崇、平井宏征、山本大介
青山達也、松井俊昭、中原智志、玉谷正幸